

# 震災日記 Part 2

平成23年5月19日

重井医学研究所附属病院小児科 小川 誠

## 目次

- ・はじめに
- ・日記
- ・参加チームの紹介
- ・渡波（わたのは）小学校の紹介
- ・避難所生活の問題点
- ・石巻医療圏での問題点
- ・今後の方針

## 【はじめに】

平成23年4月27日、一通のメールが届きました。

「渡波診療所は昨日から渡波小学校の医療班の中に入り、地区の小児科ニーズに応じていく形になりました。プレハブは昨日取り壊されました」

4月1日に開設され、私がそして柴野先生がつないできた一本の線が切れてしまいました。メールの主は診療所開設から加わり最期を見届け、次の赴任地の長崎県壱岐島に向かっているNsからのものでした。



石巻市は北上川が流れる県内有数の穀倉地帯。そして、世界3大漁場の一つである三陸沖を抱える資源豊かな町です。平成17年4月、旧市に加え、桃生郡の河北町、雄勝町、河南町、桃生町、北上町と牡鹿郡牡鹿町の一市六町の合併により新市が誕生し、人口は17万人、世帯数は約6万世帯（17年9月末現在）です。合併後の石巻二次医療圏（人口23万人）の主な医療機関には地域の中核的な機能を持つ石巻赤十字病院（404床）、石巻市立病院（206床）、石巻市立雄勝病院（42床）、女川町立病院（98床）、石巻市立牡鹿病院（40床）などがあります。

- \* 石巻市立病院 3月13日・14日 患者全員へリで救出。
- 石巻市立雄勝病院 患者・医師ら64人死亡・不明、生存確認6人。
- 女川町立病院 4月から公設民営化予定。1階部分の使用不能。

私達が活動している渡波地区は石巻中心部から更に東に5kmの場所にあります。今回は診療所が取り壊されたため、渡波小学校の避難所診察室での活動に変更されました。

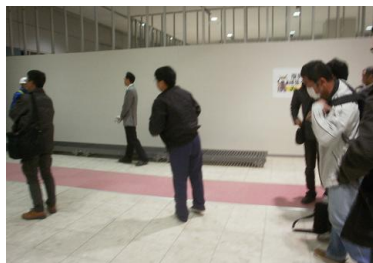
医療は三次救急を担う石巻赤十字病院と二次救急を担う石巻市立病院を中心に成り立っていますが、中心部を離れると極端に医療機関が少ない医療過疎地域です。特に小児医療は入院施設が石巻赤十字病院（小児科医4名）にしか無く、石巻市立病院に1名、開業医7名（内震災で2軒が流され、5月11日現在3軒で診療再開）で、全てが旧市街地に集まっています。この地区での診療状況と、今後の問題点についてまとめてみました。



## 【日 記】

5月5日（木）

5時30分早島駅発の瀬戸大橋線の電車に乗って出発。今回はリュックだけで出発。新大阪駅からバスで大阪国際空港（伊丹空港）にむかい、8時25分発のJALで仙台空港に。機内はがらがらで1 / 3位。仙台空港はターミナルビルが使えず、荷物は手渡し。仙台空港アクセス鉄道が不通のためバスに乗って仙台へ。



仙台空港

40分弱で仙台駅東口に到着。途中、高速道路を境に東の海側では大きな被害がみられるが、西側に被害は軽度。道路が防波堤の役割をしたようだ。生産を開始した麒麟ビール仙台工場がみえた。

おにぎりを買って西口の石巻駅行きのバスにぎりぎり間に合う。12時過ぎにサイボーグ009に迎えられて駅に到着。ジャパンハート（JH）の車で渡波小学校へ到着。



岡山医療センター小児外科浅井先生、女医さんともう一つの拠点であるロイヤル病院に行っている都立墨東病院総合診療科のDrと計4人。てきぱきと動く青柳Nsは診療所内を完全に把握していた。小学校に避難している人は約360名。その他、JA、渡波中学校、保育園に各40名程度。石巻医療圏のエリア6Bに属するこの地区は高知大学に引き続いて愛媛大学チーム（第5次）が4月初めから幹事をしている。

ピースボート主催で乙武洋匡さん講演会があった。帰りにグラウンドでサッカーをしている姿を写真に撮った。

午後6時には石巻日赤病院のミーティングに参加。咳患者の増加している渡波地区に県からN95マスク700枚を配布するとのこと（結局実物は誰も見ていない）。

宿泊は「あいわグループホーム・アイユーディサービス・高齢者宿泊施設」に泊めていただく。夕食、入浴、ベッド付きでとても快適。前回とは雲泥の差。

浅井先生の大食漢は相変わらずで、皆しばし嘔然。岩手医大出身のお父さんと遠野でがれき掃除をしてきた帰りとのこと。何でもできることはあるとはいえ、実行したお父さんには頭が下がる。



## 5月6日（金）

引き続き小学校診療所を担当。

出来るだけ地元診療所に患者を引き継ぐ事を確認。また、SSB（ショートステイベース：外来以上入院未満患者の受入：ロイヤル病院4階）の積極的活用，在宅の通院不能な患者を掘り起こして日赤本部に報告。

短期処方 は診療所内，30日までの長期処方 は日赤（3日後までに届く），その他は地元調剤薬局へ。薬剤師がチェックしてくれるため間違いがなく楽。各チームがもってきた薬は責任を持って回収することに。管理者不明の薬が多量にあることが問題に。

本日外来71名（内小児6名）。地域に引き継ぐも，地元に内科が2軒しかなくたいへん混んでいる，通院手段がないとの訴えが多い。

体育館と裏門前に手洗い用の簡易型水道が設置された。

外来患者数71名（小児6名）。花粉症は激減。高血圧，不眠が多い。



JH

北多摩医師会            松山日赤  
薬剤師会            松江日赤  
愛媛大学

## 5月7日（土）

岡山日赤医療班が加わる。緩和ケアのDrがいて，重井医学研究所附属病院の訪問看護にお世話になってますとのこと。愛媛大学は第5次チームで引き上げ，今後は中部4大学チームに幹事が引き継がれることに。お笑い系，マジシャン等楽しいメンバーが多く，皆で別れを惜しんだ。

5月11日から小学校が再開される。渡波小学校は浸水地域であり避難者も多いため，低学年は貞山小学校，高学年は山下中学校へスクールバスで通う予定。

本日は患者数42名（小児5名），晴れて強風のせいか咳患者が目立った。

富山のチューリップテレビから，咳患者についての取材あり。東北放送の手伝い。



濃色が愛媛大学，淡色が名古屋大学，赤がJH，その他が薬剤師

制服が野暮ったいとのこと，別名四国電力（愛媛大），中部電力（名古屋大）。日赤はさすがにかっこいい。でも，夏は暑いだろうな・・・。



## 5月8日（日）

午前中、仙台地方に竜巻注意報発令。晴天から一転強い雨風となった。毎日新聞記者が心のケアについて取材に来る。ここではやっていないと答える。

地域の在宅患者の掘り起こしについて、区域マップを作成してローラー作戦を行うか？地元開業医は再来のみの扱いで、受け皿ができていない。

診療所内の模様替えがあった。余分な機材、薬品などを処分して診療スペースを確保。診察中のプライバシーが保てるようになった。

## 5月9日（月）

JHの青柳Nsに代わって竹原Nsが着任。北海道足寄の病院で期間契約終了後フェリーで来た。夫が海上自衛隊にいて長期に家を空けるため、日本各地を仕事で回っているとのこと。小児の障害児在宅看護を希望している。今回は夫がインド洋から帰ってきたが、6月2日までは当地でボランティアを行う予定。

吉岡秀人先生の訪問あり。JHは無名だが、情熱大陸の吉岡先生は有名人で、名大のDrと写真を撮っていた。

外回りのスタッフから、粉塵のすごさが話題になった。サージカルマスクでは内側も真っ黒に汚れる。N95マスクをすることになった。

外来患者数50名（小児4名）

## 5月10日（火）

朝から雨の天気予報も、出勤時には晴れ。今回は天気に恵まれている。日頃の行いの良さからかな……。早朝の雨で埃が少ないせいか、咳の患者が減少。何故か残尿感、頻尿を訴える中年の女性が目立った。

外来患者数53名（小児6名）

夜、グループホームで会長さんとテレビを視ていたら、TBCテレビNスタで取材に来ていた場面が放映された。私も最後の一瞬写った（数秒）。



岡山日赤のメンバーとお別れ

## 5月11日（水）

幹事が岐阜大学に交代。巡回診療はできるだけ縮小して、診療所に来てもらうよう呼びかけることになった。

九州の厚生年金グループが参加。普段は石巻日赤で準夜部門を担当しているが、本日は休みのためこの地区の手伝いに来てくれた。小児科医が1名混じっていた。

朝、石巻薬剤師会の会長さんが挨拶に訪れたので、一緒に記念撮影。避難者もできるだけ外を見て復興を実感して欲しいので、薬はできるだけ院外薬局にとりに行かせて欲しい。この地方は幹部に女性が多いような気がする。



？ 高知 薬剤師会会長 私 徳島 名大 名大スタッフ 真ん中後が岐阜大 Dr  
 外来患者数 4 5 名（小児 5 名）

グループホームで会長さんが送別会を開いてくれた。津波の時の話など色々教えてくれた。通所・入所者と職員がとても仲が良くて良い雰囲気。お母さんの「尽くせよ・・・」という遺言を守っているようだ。



鯨の刺身



浴室



会長さん

### 5月12日（木）

職員の体調不良，通勤渋滞（多くが仙台市内，松島に宿泊）で朝のミーティングに全メンバーが揃いにくい。子どもたちは5月9日から小学校が再開されたため，午後3時にバスで帰ってくる。診療終了と重なるため，小児に限り終了時間を午後4時に延長することに決めた。JH仙台事務所より，交代の小児科清水 Dr と新しいNs が加わった。

午後1時仙台駅発の空港行きバスに乗るため，渡波小学校を離れる。仙台事務所によって，牛タンをスタッフにご馳走して分かれた。



今回の荷物は1つ



交代メンバーと



仙台空港

## 【参加チームの紹介】

私が現地に滞在していた期間に6B地区を担当した医療チーム。赤字が幹事チーム。

5月5日	5月6日	5月7日	5月8日	5月9日	5月10日	5月11日	5月12日
愛媛大	愛媛大	愛媛大				岐阜大	岐阜大
		名古屋大	名古屋大	名古屋大	名古屋大	名古屋大	
松江日赤	松江日赤	岡山地赤	岡山地赤	岡山地赤	岡山地赤		庄原日赤
	松山地赤	松山地赤	松山地赤	松山地赤	高松日赤	高松日赤	高松日赤
北多摩医師会	北多摩医師会	北多摩医師会	北多摩医師会			厚生年金	

ほとんどが松島町の旅館に滞在。名古屋大学は仙台市内のホテル、厚生年金チームは古川市から通っていて、朝は交通渋滞で仙台からは3時間以上、松島からも2時間近くかかります。

\*各施設のホームページから引用

### 松江日赤



救護班第8班が5月7日に帰還しました。

今回は石巻市渡波町を主な活動拠点とし、救護班活動と、こころのケア活動に従事しました。

### 松山地赤



こころのケア要員2名を含む第9班救護班8名は、無事任務を終え5月10日（火）に帰院しました。帰院後の報告会では、班長の西崎隆外科部長から、「被災地は災害発生後の慢性期に入っている。医療支援は2種類に分かれ、一つは被災者のこころのケア、生活の自立を促すこと、もう一つは被害が大きく未だライフラインが回復していない地区の医療支援を行うことだった。こころのケア班と医療班に分かれて活動し、医療班は石巻漁港近くの渡波地区を巡回した。全壊、半壊の家屋の2階に住んでいる人（2階族）は医療が取り残されているのではないかと声をかけて回った

### 岡山地赤

第10班 医師1名、看護師2名、その他3名、こころのケア要員2名(5月6日～5月11日)

…宮城県石巻市周辺

特別班 こころのケア要員1名(4月28日～5月5日)…宮城県石巻市周辺

特別班 看護専門学校専任教師1名(4月28日～5月5日)…石巻赤十字看護専門学校

特別班 看護師1名(5月3日～5月10日)…石巻赤十字病院(ER業務支援)

特別班 薬剤師1名(4月28日～5月5日)…石巻赤十字病院(薬剤業務支援)

特別班 薬剤師1名(5月3日～5月10日)…石巻赤十字病院(薬剤業務支援)



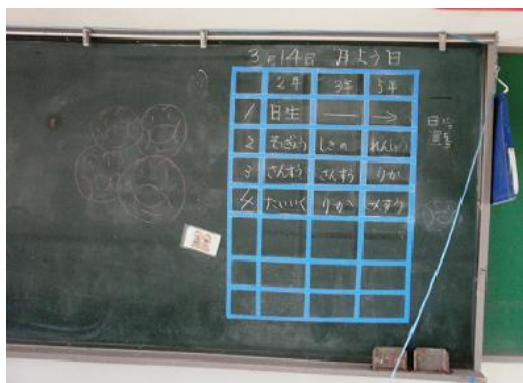
## 【渡波小学校】

今回我々が活動拠点とした渡波小学校を紹介します。



渡波（わたのは）地区は石巻市街地から旧北上川を越えて東に約5 km、比較的海に近いところに位置します。女川街道をもう少し東に行けば原発の街女川に続いています。医療機関は東西の隣接学区に各一カ所の内科医院があるのみです。

震災時には一階の教室に水位1 m程度の津波が押し寄せ、今も黒板やカーテンにその跡がみられます。



黒板下1/3の  
ラインが津波  
が来た線

小学校1階の教室 3月14日（月）



3月11日（金）のまま

震災直後から避難所として体育館や教室が使われています。保健室には石巻地区6 Bの中心として診療所と医療本部が置かれていて、ここを拠点に渡波中学校、保育所、JA等で巡回診療をしています。5月5日現在で約360名が避難所にいます。

校庭はほとんどの瓦礫が片付けられて、隅に段ボールの山がありますが徐々に減ってきています。流された自動車も数台が残るだけです。電気は通っていますが、水はまだでトイレも簡易式です。入浴は週1回自衛隊が回ってきます。保育所まで行けば毎日シャワーが使用できます。

5月9日からは低学年が貞山小学校、高学年が山下中学校に通うことになりました。前日は兵庫県のボランティア団体がバス2台でやって来て、机などを運んでいきました。朝8時過ぎに校庭に集合してバスで登校して、夕方3時に帰ってきます。

5月11日は二次避難で何人が秋田に移動したため、避難所には約320名が残っています。



産経新聞から配信されたニュースを紹介します。

### ①黒い大きな波が来た。僕らは体育館に閉じ込められた

3月11日

大きな揺れが来たのは掃除の最中だった。「机に隠れて」。先生の言葉で机の下に潜り込んだ。

揺れが収まり、みんな体育館に移った。《子供たちは全員無事です》。高橋校長は父母らに一斉メールを送った。外は雪がちらつき始めていた。「寒いから外に出ないで」。この判断が多くの子供を救うことになる。直後にどす黒く濁った津波が押し寄せた。

石巻湾の堤防からわずか約600メートルの小学校。先生は児童や避難してきた住民を舞台や2階の観覧スペースに誘導した。

「あっちからもこっちからも波が来た。魚と一緒に車が浮いていた」

3年1組だった尚希君（9）は2階の窓から見た光景を忘れられない。

男の先生は扉を押さえながら「この建物は大丈夫」と祈り続けた。波は2メートルを超えていた。奇跡的にも体育館の中は数センチ浸水しただけだった。波が引き、学校への避難者は2千人に膨れ上がった。救援物資が届くまでの4日間、備蓄用のビスケットを分け合っていた。

### ②修了式なのに友達はまだ。悲しい知らせも聞いた

3月24日

登校したのは全校児童453人のうち6割。遠くの親戚の家に避難している子も多いのだろう。

聖海君は担任の先生から悲しい知らせを聞いた。「同じクラスだった直人君が亡くなったって。いつも遊んでいたのに…」

ここあちゃんも、学校に入って初めてできた友達の真矢ちゃんが亡くなったことを知らされた。

「よくおうちで勉強した。もう一緒に遊べない…」

同校で犠牲になったのは、地震直後に親が迎えに来た子供たちだった。避難する途中で津波にのまれた可能性が高い。

### ③臨時職員室ができた

4月5日

先生たちは何とか開けることができた2階の教室の一室に机を運び込んだ。学校再開の第一歩となる臨時職員室だ。先生たちはそこを拠点に、失われた資料や名簿を作るパソコンを借りるため、周辺の学校を回る日々だ。特別支援学級担当の石森知子先生（51）は「それぞれが工夫してやっていくしかない」。

6年だった心海（しんかい）君（12）は卒業式がないまま中学校に行くことになり、少し寂しそう。先生たちは学校再開の準備で今は手いっぱいだが、中学校と相談して5月中旬に卒業式を開く方向で調整している。

高橋校長は力を込める。「遅くなってもきちんとした形で心に残る卒業式をしてあげたい。東北の復興を担う子供たちですから」

### ④有名人ががやってきた！

4月7日

「わあ、本物だ」。慰問に訪れたタレントの田中義剛さんと相田翔子さんに子供たちの歓声が上がった。校舎2階で避難生活を送る3年2組だった聖海（せあ）君（9）は目を輝かせた。「この間はベッキーが来た。ベガルタ仙台の人ともサッカーをしたんだ」

無邪気な笑顔からは想像もできないほど、学校は大震災の傷痕を残す。1階は瓦礫こそ取り除かれたものの、窓ガラスは割れ、床には泥が。外のフェンスにも車が引っかかったままだ。

教室や体育館は避難者や支援物資であふれ、住民が炊き出しなどで忙しそうに動き回る。3年1組だったここあちゃん（9）は体育館での避難生活でできた友達の綾望（あやみ）ちゃん（4）に絵本

を読んであげていた。

「早く普通に戻りたい。友達といっぱい会っていっぱい遊んで一緒に勉強したい。学校が始まったら図書館で本を借りたいな」

学校再開にあたって、どれだけの教室が使えるようになるかは分からない。高橋義樹校長（59）は「職員室の中も全部流された。ゼロからの出発です」と話した。

### ⑤笑顔で「ゼロからの出発」 がれきの中の子供達

4月9日

東日本大震災は多くの子供たちの未来も奪った。中でも宮城県石巻市の被害は甚大で、120人以上の児童・生徒が亡くなった。安否不明の子供もたくさんいる。市立渡波（わたのは）小学校（児童数453人）は校舎1階が津波にのみ込まれた。大半の児童は体育館に避難して無事だったが、7人が犠牲になった。2、3階には600人の住民が身を寄せ、校庭の周りには大量の瓦礫（がれき）が残る。それでも子供たちは笑顔を絶やさず、先生も21日の学校再開に向けて努力している。渡波小学校の復興を見つめていきたい。「被災地のいま」をその都度、伝えるために。

### ⑥久しぶりに友達に会えた。でも転校だなんて…

4月13日

「心配してたんだぞ」。4年2組だった亮哉君（10）は、震災以来、連絡が取れなかった春稀君（10）を校庭で見つけると、肩を組んで笑顔を弾けさせた。震災後、3月24日に修了式があったが、出席できない子も多かった。

「俊ちゃん転校するんだって」「えー」。3年1組だった尚希君（9）は俊介君（9）の転校を知り、思わず声を上げた。自宅を津波で流され、転居する被災者も多い。

「フレー、フレー、俊ちゃん」。運動会の応援を思い出し、目を赤くしながら精いっぱい別れを告げた。「俊ちゃんに会いに自転車で絶対行くから。どんなに遠くても行くから」

別れは友達だけじゃない。先生たちの離任式もあった。渡波小を去るのは先生24人のうち10人。教室は避難所になっているため、校庭でお別れの会をした。

「まだまだ大変なことがあると思いますが、自分の可能性を信じてください」。5年1組の担任だった千葉優樹先生（29）はこうあいさつした。渡波小にいたのは半年と短い。それでも忘れることができない光景がある。

### ⑦転校がいやで避難所を飛び出した

4月27日

「山形行くことが決まったぞ」。渡波小体育館で避難生活を続ける一仙君は父親の一洋さん（63）からそう聞かされると、「行かない」と反対し、体育館を飛び出した。

4年2組の姉、ここあちゃん（9）とも山形の避難先に応募することは4月上旬に聞いていた。そのときは「いつか戻ってくる」と言われ納得していたが、実際に決まると心は揺れた。「友達に会えなくなるから行きたくない」。かたくなな弟を見て、ここあちゃんも反対した。

「電話もらったばかりで申し訳ないんですが…」。一洋さんは少し悩んだ末、石巻市役所に断りの電話を入れた。

### ⑧間借りが正式に決まった

4月末

高橋義樹校長は苦渋の決断を迫られた。

これまでは校舎での授業再開を目指し、避難所になった教室を空ける努力を続けてきた。しかし、市教委が「津波を受けた校舎は危ない」と方針を転換、再考を余儀なくされた。「子供たちのことを一番に考え、一刻も早く勉強できる環境を整えたい」。高橋校長は市教委の方針受け入れを決め、

連休中も保護者説明会や授業開始の準備を急ピッチで進めた。

### 隣の学校に転校が決まった。いつか絶対戻ってくる

5月6日

4年生の蓮（れん）君（9）は、母親の亜紀さんと渡波小にお別れをしに来た。「何かあっても遠くまで迎えに行けないのが怖くて…」。車が津波に流された亜紀さんは、校舎の間借りを受けて、隣の万石浦（まんごくうら）小へ転校させることを決めた。

蓮君は母親から転校を言われ驚いた。でも、友達も一緒に転校すると知り、自分を納得させた。

「最初に友達がたくさんできたのが渡波小。いつか絶対戻ってきたい」

石巻市教委は、年度中にも近くに仮設校舎を建てる方向で検討している

### ようやく授業が始まった。中学校の教室はなんでもでかい！

5月9日

「黒板届かねえ！」。5年2組の亮哉（りょうや）君（10）は黒板に日付を書こうとしたときに驚いた。理科室のイスも足が床に届かない。「危ないから実験は立ったままやらせなきゃ」。理科専科の鈴木牧子先生が問題点を洗い出していた。

この日朝、渡波小の校庭に集まった児童は大型バス6台に分乗。「遠足みたい」と喜ぶ4年1組の鈴音（すずね）ちゃん（9）は山下中の校舎4階から外を見下ろし「眺めもすごい」。

### ⑩きょうも離ればなれで勉強した

5月10日

渡波小が間借りしたのは貞山小学校と、その隣の山下中学校。1校で全員を受け入れられず、1、2年は貞山小、3～6年は山下中と離ればなれになった。

渡波小からバスで“登校した”2年1組の一仙（いっさ）君（7）は「明日もバスで行くっていうから転校したの？」と間借りの意味を理解できずに首をかしげた。

### ⑪負けないよ！ 渡波小も授業再開…でも校舎は間借り

5月11日

東日本大震災から2カ月がたち、宮城県石巻市立渡波（わたのは）小学校でもようやく授業が再開された。しかし、市の方針変更のため、バスで30分離れた中学校と小学校の校舎を間借りすることに。転校する友達もさらに増え、始業式に350人以上いた児童は306人になった。それでも子供たちは新たな一歩を踏み出した。



### 【避難所での問題点】

震災後2ヵ月が経って避難所で生活する人の人数はかなり減ってきています。

日赤で石巻診療圏での要介護者アセスメントが終了しました。全部で76名いますが、45%は移動を拒否しているので、説得して福祉的避難所に移ってほしいとの事です。

無医地区の雄勝に救急車が配備されたため、夜間宿直体制は不要となりました。

今後の問題としては160カ所残っている避難所の慢性化。患者は減少しているがニーズはある。エリアの合併、役割変更を行い、「依存性、生活不活発化」を防ぎ、自立支援（やれることは自分です）、SSB（ショート・ステイ・ベース）のロイヤル病院の活用を行いたいとのこと。

問題は**避難所の環境が未だに改善されないことです。**

渡波小学校も簡易トイレで、入浴は週1回の自衛隊が来た時のみです。

## 【石巻医療圏の問題点】

現在、石巻赤十字病院を中心に系統的な医療を提供しています。情報、指示ラインの一本化ができており、私達の常識からすると考えられないような理想的な姿で、「石巻の奇跡」と呼べます。

しかし、前述したように元々が医療過疎地であり、特に小児医療の分野では考えられないような悲惨な状況です。

新聞から現状を紹介します。

**応援医師を一括差配 3000人共闘「先駆例」** 朝日新聞2011年4月18日朝刊

石巻赤十字病院の石井正医師が3000人の医療チームを一括的に統括する石巻医療圏での先駆的例が紹介されている。以下要点をまとめた。

「5千人を超える死者・行方不明者が出た宮城県石巻市で石巻赤十字に運ばれた休館患者の数が1カ月余りで1万人を超えた。「無償の医療機関として救急医療を一手に担い、300カ所以上の避難所を巡回する。全国から派遣された医師ら計3千人を一括管理し、効率的に配置する体制を敷いている。」

とのこと。

石巻市のほか、東松島市や女川町といった石巻圏の住民計22万人の受け皿になった。この地域には

東北大学を窓口とした各大学病院県との取り決めで派遣された各県立病院、医師会、精神科医等の医療チームが順次応援に入っている。

石巻赤十字病院医療社会事業部長「石井正医師（48）」は「各チームが個別に活動するのは非効率で対応しきれない」と考え、すべてを石井医師が一元的に統括する「石巻圏合同救護チーム」を立ち上げた。

石巻圏を14エリアに分け、長期滞在できるチームを各エリアの「幹事」に指名して300カ所以上の避難所を任せた。同病院への救急患者は、重傷は従来の救命センターが担当し、軽傷、中傷を応援組に任せた。毎日打ち合わせを開き、エリア幹事や救命センターが避難者のニーズ、流行している感染症などを報告。全体を把握した本部が、新たに応援に入った医療チームを必要な個所に振り分けた。

**石井医師は「2月に県から石巻地域の災害医療コーディネータを委嘱されている」と公的な立場であることを説明。「オールジャパン」を強調し、指示に従ってもらったとのこと。**

現時点では理想的な医療体制ができていますが、時間が経つにつれ元に戻ります。そうなった時に、安心して住めるための医療体制を維持することは困難です。子どもたちを育てる若い世代が定着するには、教育・医療機関はなくてはならないものです。これは、現状を考えれば行政の努力だけでは無理なことです。

震災直後の興奮した時期を過ぎても、完全復興までの数年間は継続する援助が必要と思われる。

## 【今後の方針】

私個人的には渡波地区の復興のお手伝いをしたいという思いが大変強いです。

JHの吉岡代表はこの地区全体のことを考えれば、二次救急を担う石巻市立病院の復興がまず必要と考えている様です。元々小児科は1名の医師しかいなかったところですので、ここに常時もう1人の小児科医を派遣することによって、石巻赤十字病院への一極集中を防げるとのことです。

石巻赤十字病院は小児科医4名で新生児から三次救急までを担当しています。その前に、入院や時間外に対応できる二次救急病院があればゆとりが生まれます。

今のところ当院小児科、川崎医大小児科を軸に全国から公募した医師で当たるよう交渉中です。残ったものの負担は大きいですが、貴重な経験から得られるものはその何倍にも達するものと思います。是非、協力を続けていきたいと思います。

また、医師だけでなく他職種も足りないことは明白です。もう終わった事ではなく、これからが復興医療の開始と考えて協力を支援して行けたら素晴らしいことです。震災発生直後に感じた気持ちを持ち続けたいものです。

石巻市立病院に関する記事を紹介します。

朝日新聞 5月13

日

東日本大震災の翌朝、浜松市にある聖隷三方原病院の救急医、矢野賢一（やの・けんいち）（40）はドクターヘリで福島県に飛んだ。大災害時、緊急医療にあたる「災害派遣医療チーム（DMAT）」の任務だった。

福島県立医大で待機していた3月13日午前10時、出動要請が来た。福島ではなく、宮城県の石巻市立病院から手術患者を運んでほしいという。

「地震でけがをした人の緊急手術でもしたのかな」。矢野はヘリに乗り込んだ。

約30分後、汚泥とがれきに覆い尽くされた街に、5階建ての病院がぼつんと見えてきた。「えっ、こんなところで手術をしているのか？」

その病院には患者約150人とスタッフ約250人が取り残されていた。地震時、胃の手術中だった患者は、仮縫い状態で手術を中断したまま40時間がたっていた。水道、ガス、電気は止まり、発電機は水没。食料は尽きた。電話も無線も通じない。周囲の道路は寸断され、外との連絡のすべすらなかった。

その日の早朝、循環器科部長の赤井健次郎（あかい・けんじろう）（52）は助けを求める最後の手段として、外科部長の内山哲之（うちやま・てつゆき）（44）を約5キロ離れた石巻赤十字病院へ送り出していた。内山は、がれきだらけの冷たい水に腰までつかり歩いていった。

そして、ドクターヘリが来た。内山が無事にたどり着き、ヘリ出動につながったのだと赤井は察した。

ヘリから降りた矢野は石巻市立病院の姿に息をのんだ。1階の窓に車や流木が突き刺さっている。「患者1人と手術スタッフを運ぶ」という要請だったが、衛星携帯電話に叫んでいた。「1人運んですむ話じゃありません！」

矢野が「いしまき、いしまき」と連呼するのを、赤井は横で聞いていた。名も知らぬ街の病院を救おうと、必死になってくれていると感じた。

日没直前に、追加のドクターヘリ2機と自衛隊ヘリが到着した。危険な状態にあった患者6人を急いで運んだ。

その夜、福島県に戻った矢野は、石巻市立病院のことが頭から離れなかった。残る140人余りの患者



はどうなるのか。だが、矢野のチームの任務は福島県での活動だ。会議で石巻の話は出なかった。

県境の见えない壁を感じた。矢野は深夜、聖隷三方原病院に電話をかけた。「病院全体を避難させなくては。大変なことになります」

上司の早川達也（はやかわ・たつや）（44）は、ただならぬ状況を察した。すぐ旧知の宮城県の医師に連絡した。日付が変わるころ、宮城のDMAT本部から支援の正式要請が福島に届いた。

翌朝7時に「全患者脱出作戦」が始まった。福島に集結していたドクターヘリ全6機を使い、病院近くの運動公園にある自衛隊キャンプに、ピストン方式で運んだ。

病院では、窓がない真っ暗な階段をスタッフが患者を担いで下り、搭乗を待った。

途中で日が暮れた。残る患者は65人。夜間装備のないドクターヘリでは日没後の飛行は危険だ。矢野があきらめかけた時、電話が鳴った。「自衛隊ヘリが、向かっている」

夜9時前、自衛隊の中型ヘリが2機到着した。闇の中、搬送が再開した。ありったけの懐中電灯を並べ、病院からヘリへ、通り道を照らした。

最後の患者を乗せたヘリが飛び立った。闇の中で、だれかが「万歳」と両手を挙げた。歓声と拍手が沸いた。

3・11後、東北に多くの「震災ドクター」たちが駆けつけた。極限の現場で、見知らぬ医師同士の思いが重なった。長年にわたる医療者たちのつながりに、支えられた活動もあった。



（このシリーズ全5回は、編集委員・中村通子が担当します。本文敬称略）

早川達也さん（左）と矢野賢一さん

想いをまとめることができず、膨大な量になってしまいました。現地を見たこと、考えたことに加えて、今回は実際に津波を経験した方々から貴重な話を聞くことができました。避難した二階の窓から車に乗って流されていく人をたくさん見たこと。そのときの人の顔までしっかり見えたけれど、どうすることも出来なかった・・・。

サッシ越しに津波の水が押し寄せてきたのを、シーツを丸めて水の侵入を防げた。翌日木の上に載っている車から母子3人を助け出した。赤ちゃんの笑顔に皆ほっとしたこと。腰まで水に浸かって一緒に助けた職員が2日後自宅に戻ったところ、家は流され妻が行方不明になったことから、「頭の線が切れて」仙台の病院に入っていること・・・。

淡々と話してくれました。今回私達が宿泊させていただいたグループホームの会長さんです。そして、遠くから助けに来てくれて有難うとって精一杯もてなしてくれました。この素朴な人たちの忍耐強さ、優しさに言葉も出ませんでした。ただ、今後も出来る限りかかわって行こうと心に誓いました。

一人でも多く、私達の想いに共鳴してくれることを願っています。

最後になりましたが、こんなに素晴らしい経験をさせていただき、重井理事長、瀧院長、ジャパンハート吉岡先生に感謝します。